

地中海古代都市の研究 (127)

フィガリアの城壁と建築遺構の一般調査 2009

9. 建築歴史・意匠-4. 西洋建築史

正会員 ○伊藤重剛¹⁾ 吉武隆一²⁾

ギリシア フィガリア 城壁 発掘

1. はじめに

熊本大学ギリシア古代建築調査団(団長 伊藤重剛)は、ギリシアの古代都市フィガリアにおいて、将来の発掘調査のために2008年夏に予備調査、2009年夏にはセスナ機を使った航空写真撮影と地形測量および一般調査を行なった。本稿では城壁を中心に、現在までに発見された建築遺構の概要について報告する。

フィガリアはペロポネソス半島西部に位置し、メガロポリスから西へ26 km、オリンピアから南東へ33 km離れた山間部の古代都市である。アルカディアが東に、エリスが西に、メッセニアが南に広がり、ちょうどその3地方が境を接する山間部にある。フィガリアの北東6.5 kmには、フィガリアの町が施主となって、アテネのパルテノンの建築家イクティノスが設計したとして有名なアポロ・エピクリオス神殿がある。

2. 既往研究

紀元2世紀のローマの旅行家パウサニアスがフィガリアについて、記録を残している。それによると、スパルタ人が前659年にアルカディアを攻め、さらにそのまま西に侵入してフィガリアを攻撃し陥落させたとある。さらに市民は脱出したが、その後オレスタシオン人の百人隊の助力を得て奪還したと書かれている¹⁾。(飯尾訳『ギリシア記』8.39.3-4)

地形や建築物については、「張り出した岩場の上に市の城壁が築いてあるが、登ってみると、丘はすぐに起伏もなく平らになっている。ここに『安泰加護のアルテミス』の神域と立形の石造神像。」(8.39.5)とあり、高台の上に市域が広がっていることが記されている。このほかアゴラには「自由格技選手アラキオン像」と「オレスタシオンの精鋭部隊の合葬墓」(3.40.1)があり、また体育場内にあるヘルメス像(8.39.6)、そしてディオニュソス神殿(8.39.6)があると言及している。しかし現在まで、こうした建築遺構は全く発見されていない。

近代になると、1927年にギリシア人考古学者のオルランドスが市域内東端にある泉を²⁾、アメリカ人考古学者のクーパーがフィガリア一帯の一般調査の中で³⁾、フィガリアに言及している。最近の調査としては、文化省オリンピア支部のアラポヤニ氏が、1994年から数年にわたって市域内南側の小高い丘でアテナ・ディオソステイロス神殿を発掘しており、簡単な報告がなされている⁴⁾。これら以外は全く調査はなされておらず、ほぼ手付かずの遺跡である。

3. 地形

ペロポネソス半島は大半が山地で占められており、平地は周囲の海岸地帯や、山地の間にある盆地のみである。フィガリアの周辺も半島中央部から続く山地であり、市域の南にネダ川が深い谷を形成しながら、東から西に流れている。フィガリアの市域はその谷の頂「クルドゥブリー」の丘から北側に広がるわずかな平地地を中心としている。この平地地から北側は斜面となり、その頂点がアクロポリス(標高555 m)であり、最近建設された小教会がある。アクロポリスに至る斜面の低い部分はオリーブなどの畑となっているものの、上部の多くは灌木の林



図1 フィガリアの位置

で覆われている。中央の平坦地は現在オリーブ、ブドウなどの畑となっており、その東側の平坦部分および南東におりる斜面に現在の村があり、60軒ほどの人家が建っている。ちなみにギリシアでも過疎化が進んでおり、村の住人の大半は高齢者である。平坦部の南側はネダ川の谷の縁まで緩斜面となっており、その高くなった「クルドゥプーリ」の丘でアテナ神殿の遺構が発掘されている。パウサニ阿斯が書いた「張り出した岩場の上に市の城壁」は、地形から判断するとおそらく南側の城壁だと思われるが、現在ネダ川を望む崖に沿ったところには、城壁の痕跡は見当たらない。

現在の主要道路は、村の中を東西に走り、西側からアクロポリスの山裾を通過して城壁を北の方へ抜け、アクロポリス北側のペリボリア (Periboria) の村と通じている。また村を東へ抜けると城壁の端部を通り、やがてネダ川へと続く谷の急斜面を下り対岸へと続いている。

城壁はアクロポリスのすぐ北側を囲むように、南東と南西にそれぞれ山の斜面に沿って下っている。西側の城壁は斜面に沿って南東に下った後、西へ折れて小高い二

つの丘へと登り、それぞれの頂を結びながら、そこから南東に向かってネダ川の谷の方へ続いている。東側の城壁は同じく斜面を南東に降りながら途中で南へと方向を変えながら、市域を丸く囲むようにして、やはり谷の手前まで続いている。前述のようにパウサニ阿斯の記述にある城壁は、南側の城壁と思われるが、現在はそのような城壁が見あたらないのは、人為的に破壊されるか、あるいはネダ川に落ちる谷の急斜面の頂にあったため、長い年月で崩壊したか、あるいは深い谷が敵の侵入を阻む天然の城壁の役割を果たしており、作る必要がなかった部分もあったのかも知れない。

4. 城壁

城壁は全周を確認できるわけではないが、城壁で囲まれた市域は東西1.4 km南北1.4 km、面積は約120 haである。城壁は部分的に灌木で覆われたり埋まったりしているが、全体的な残存状況はよく、約3.1 kmが追跡できる。上面の仕上げが残っている箇所は見られないが、幅はどこも約2.1 mであり、高さは残存

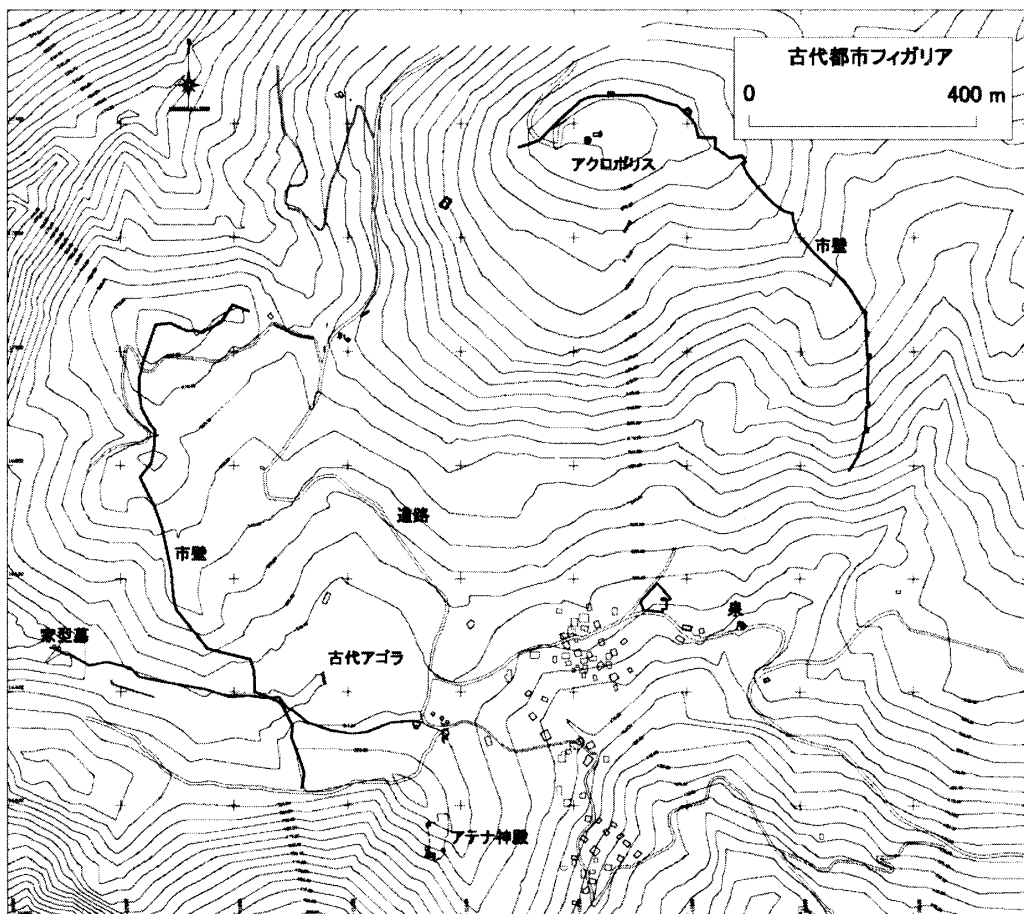


図1 フィガリア全体平面図

状況によるが、低いところで約2 m高いところで約6 mに達する。アクロポリスの北側から南西に下る城壁には、方形の塔がいくつか残っている。そのうち2つを実測したが、ひとつは幅5.4 mで突出が3.2 m (図3)、もうひとつが幅9.8 mで突出11.5 m、高さはともに4~5 mである。また東側の城壁では約200 mに亘って直径約5 mの円形の塔が非常によい状態で残されている。しかしながら、西側の二つの丘の周辺や、そこから南東に降りる城壁にはこれらの塔は観察されない。

石材はおそらく近傍から切り出されたと思われる石灰岩で、多くはかなり粗く仕上げられた方形の切石を用いているが、多角形ないし不整形のものも多い。石材表面は平面に仕上げられておらず中央部が凸面になっており、城壁の表面全体が粗い感じになっている(図2)。隣接する石材との接触面は表面の縁部幅数cmで、内部は斜めにやや尖ったような形となっている。石積みは、これらの石材の長手の面を表面に出し、木口面を左右の

隣接部材と接触するように積んでいる。これらの石材は城壁の外側と内側の表面だけに積まれており、内部は土と野石で裏込めされている(図5)。また城壁の外側面は立ち上がりがあるものの、内側面は城壁の上面の高さまで土が覆っており表面はほとんど観察されない。

外側表面は基本的には、これらの切石が直線の水平な目地を構成するように積まれたいわゆる「整層積み(isodomic masonry)」と見てよい。特にアクロポリス周辺の城壁や塔ではそのように観察される。(図2, 図3)しかし西側や泉の上付近の城壁では、完全な整層積みというより、水平の目地が直線として連続せず、途中で石の高さが変わったり、多角形の石材が使われたりしており、不規則な積み方となっている(図4)。かといってアルカイック時代によく見られる完全な「多角形積み(polygonal masonry)」でもない。外見的にはこれらが混在している部分もあり、多角形積みから整層積みに移行する過渡期の積み方と見てもいいかも知れない。



図2 アクロポリス西側城壁

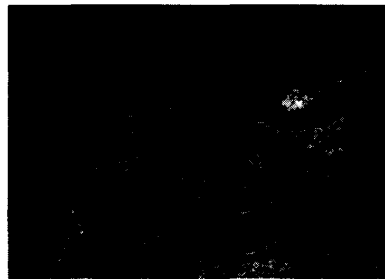


図3 アクロポリス西側塔



図4 西側城壁

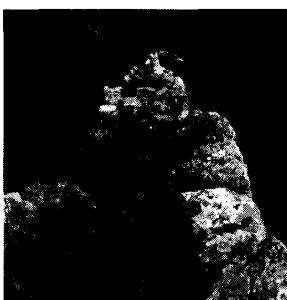


図5 西側城壁上面



図6 アテナ神殿

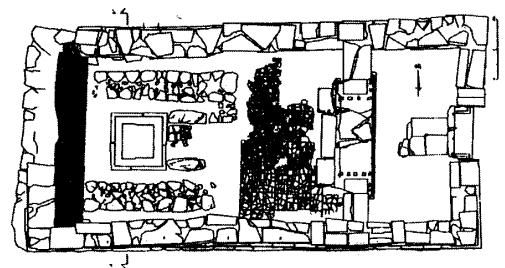


図7 アテナ神殿平面図



図8 泉



図9 家型墓



図10 円柱遺構

5. 建築遺構

1) アテナ神殿

アテナ・ディオソソティーロス神殿は、1994年にギリシア文化省オリンピア支部のアラポヤニ氏によって発掘された⁵⁾(図6,7)。周柱も前柱もなく単純に壁で囲まれた神殿で、正面幅7.70m側面長さ15.70mで様式は不明である。周囲の壁は高さ約1mほどが残っている。内部はプロナオス(前室)とナオス(主室)に分かれており、主室の中心には神像の台座とその前にテーブル上の祭壇が配置されている。⁶⁾

2) 泉

村の東のはずれで、アクロポリスから東側を下る城壁が切れる付近には泉があり、現在でも水が湧き出ている。現在残っている水槽の大きさは、正面幅3.60m奥行き1.33mである。1927年にここを発掘したオランダスによると、水槽の前には4本のドリス式円柱が立っており、三角形の破風が載っていたように復元されている。

3) 家型墓

市域の中央部から、南西へ城壁を抜けてネダ川に下る山道に沿って、2棟の家型墓がほぼ並んで発見されている。そのうちの1棟は比較的保存状態がよく、正面に三角形の破風をもち、両側の壁が前面に約50cm張り出しており、左右対称を強調している(図9)。内部は細長い部屋が左右に2列並んでおり、年代はおそらくヘレニズム時代と思われる。

4) 円柱遺構

村の中心部の現代の道路が交差する箇所には、ポロス材による円柱のドラムが3本かなり風化した状態で残っている(図10)。建物出隅部分の基礎部分のように見える箇所であるが、現在のところ何の建物かは不明である。ここから数m離れた畑の境界をなす粗い石垣の中には、石製の桁状の計量器が発見されており、この状況から判断すると、建物はストアの遺構でその中にこの計量器が備えてあったことも考えられる。

5) バシリカ

円柱遺構から約20m西に離れたところには、バシリカと思われる建築遺構が発掘されている。建物は古代の部材を再利用して建てた粗末なもので、東西、南北それ

ぞれ8m程度の大きさであり、東側の壁がややアプス状にカーブしている。東側の壁の構成部材は、古代のトロス(円形の建物)に使われたと思われる円形の壁の部材が用いられ、南側の壁の一部には直径60cm程度の円形の盾の浮き彫りが施された部材が使われている。

6) ドリス式建築遺構の部材

村の中央部を東西に走る道路の舗装工事をしたときに、壁や軒の部材がいくつか出土した。建物としては大型のものと推定され、この道路より上の現在オリーブ畑のところに、公共建築の遺構があるものと推定される。

6) このほか、近くのペリボリアの村では、アテナ神殿と同様にテーブルのある神殿遺構も発見されている。⁷⁾

6. まとめ

今回の調査で、フィガリアの城壁の概要と過去に発掘された建築遺構の概要の一端を明らかにすることができた。城壁については、古い多角形積みと整層積が混じった部分と、整層積の二種類が観察された。しかし市域の考古学的建築学的調査は、殆ど未調査の状態なので、今後はさらに詳細な地形図、城壁の建築的な実測図などを作成し、今後の組織的な発掘調査に備えたい。

謝辞

本研究は日本学術振興会科学研究費 基盤研究(S) 課題番号20226012 による研究助成を受けた。記して謝意を表する。

注

- 1) パウサニアス、(飲尾都人訳)「ギリシア記」、龍溪書舎、1991年
- 2) A. Ορλάνδος, «Η Κρήνη της Φιγαλείας» ΑΔ 11, 1927/28, σσ. 1-7.
- 3) F.Cooper, R. Stillwell edit. Phigalia, Encyclopedia of Classical Sites, Princeton Univ. Press, p.703; F. Cooper, "Topographical notes from Southwest Arkadia", Archaeological Analekta Athenon, 5, 1972, 359-67; F. E. Cooper, Greek Fortifications, 1971, pp. 111-12.
- 4) Ξένη Αραπογιάννη, «Ανασκαφές στην Φιγαλεία» Forschungen in der Peloponnes, Akten eines Symposiums anlässlich der Feier, "100 Jahre Oesterreichisches Archaeologisches Institute Athen," Athens 5.3.-7.3.1998, Sondreschriften Band 38 (2001), pp. 299-305.
- 5) Ξένη Αραπογιάννη, «Ανασκαφή στη Φιγαλεία», Πρακτικά της Αρχαιολογική Εταιρείας, 1966, 129-137,
- 6) 同様のテーブルについては、別の箇所からも出土している。X. Αραπογιάννη, "Ein archaisches Perirrhanterion aus Phigalia," AM 111, 1996, pp. 65-78, Fig. 7-10. 参照
- 7) Ξένης Αραπογιάννη, Ο Νάος των «Περιβολίων» Φιγαλείας, Αρχαιολογική Εφημερίς 2004, σσ. 41-51.

1) 熊本大学大学院自然科学研究科 教授 工博

2) 熊本大学大学院先端機構 准教授 博(工)

1) Prof., Dr.Eng., Kumamoto University

2) Assistant Prof., Dr.Eng., Kumamoto University